

## 『神宮正権禰宜和歌』検証―附 翻刻

## 要 旨

大神宮叢書所載「神宮典略（歌之部）」中の「神宮正権禰宜和歌」は、「二見浦百首」作者考証に先行する研究者が参考にしたものであるが、最近、内務省神社局本「神宮典略」写本（宗務<sub>38</sub>）十冊が国文学研究資料館史料館に宗務課引継文書として収蔵されていることが判明した。該書は藺田守良著で、藺田守宣に拠る頭註が付されている。さらにこの底本を『大神宮叢書』に転載するにあたり守宣の頭註および書入の部分を「補遺」として叢書編者が校訂したことが判明している。しかし、頭註および書入の付された位置が精確でなく、翻刻上の過誤も見受けられるので、守宣の頭註および書入を本文中に戻し、それらをゴチック体で表記したものである。

【キーワード】 神宮典略、二見浦百首、神宮正権禰宜和歌

文治二年（一一八六）「円位上人勸進之」という「二見浦百首」は太神宮法楽百首として、和歌史的に重要な意味を有している。中

でも定家は詩的実験を試み、彼の出発点となり、同時に家隆・寂蓮・慈円らの新進歌人にとっても画期的な作品となっている。

前稿「西行周辺の人物考証―『二見浦百首』作者のこと」<sup>1)</sup>を平成二五年秋の仏教文学会大会（専修大学）で口頭発表した際に、「神宮正権禰宜和歌」についての新たな報告をし、その全容を明らかにすることを約したので、今回の翻刻を基に検証することにしたのである。そこでは「二見浦百首」作者のうち不明とされた「蓮上・蓮位」という人物についての考証を行ったが、特に「蓮上」成良説の根拠となった藺田守良著『神宮典略（十四）』所載の「神宮正権禰宜和歌」目録の信憑性について言及している。

『神宮典略』は戦前の『大神宮叢書』に収録され、その「歌之部（十四）」所載の「神宮正権禰宜和歌」は、「神宮正権禰宜和歌」と「神宮正権禰宜和歌補遺」から成る。その頭註に拠ると「○左ノ頭註ハ内務省神社局本所載ノ藺田守宣補註ニカ、ル」（目録上部の頭註）・「○内務省神社局本ニハ、藺田守宣朱筆ヲ以テ増補書入セル歌多シ。今是ヲ一六〇頁已下ニ補遺トシテ収録シ、彼此照覽ニ便セ

\*石川 一

ンガ為(一)(二)(三)等ノ番號ヲ以テソノ箇處ヲ示シタリ」(歌本文上部の頭註)・「○内務省神社局本ニ見エタル守宣ノ朱筆書入ヲ作者別ニ整理シテ此處ニ収録セリ。而シテ目録ハ今校訂者(稿者注)前稿『仏教文学』では藺田守良としたが、『太神宮叢書』校訂者)ノ作成ニカ、ル。」(補遺上部の頭註)ということが分かり、その『太神宮叢書』を具に検証すると、かなり疑問点が見られる。

しばらくして、『太神宮叢書』の底本となった内務省神社局本(藺田守良・江戸末期写)が国文学研究資料館史料館に「宗務課引継文書」<sup>2)</sup>として収録されていることが判明したので、その当該写本を閲覧する機会を得たのである。

当該写本を閲覧したことに拠る疑問点を詳述する前に、「神宮正権 禰宜和歌」の翻刻を掲げることにしたい。ただし、該本を『太神宮叢書』として刊行する際に、特に目録などでは、守宣の頭註の位置について致命的な混乱が生じているので、その頭註の示す正確な位置を示すように意を尽くすことにする。ちなみに、『太神宮叢書』凡例に「内務省神社局本、第一二三八號は荒木田家舊蔵本にして、神宮正権 禰宜和歌の部に藺田守宣の書人あり。その数両神宮正権 禰宜和歌氏人の和歌六十餘首に上れり。其等は又以て本書閲読上参考に資すべきものなれば、今之を作者別に整理し、神宮正権 禰宜和歌補遺として、巻尾に併せ収録すること、せり。」とあるが、守宣頭註を「補遺」とするのではなく、頭註の付された位置をも併せて正確に反映するようにしたい(その理由は後述する)。

翻刻に際して、次の点に注意して作業を行うことにしたい。

- 1 目録の頭註は人物の右上に付されているので、それを反映し、必要に応じて「稿者注」のコメントを入れることにする。例えば、荒木田「氏良」の頭註「元満神主一男、家田一祐宜 千載集 新古今集」は該本と同様、次のように表記する。

元満神主一男、家田一祐宜 千載集 新古今集

一祐宜荒木田氏良神主作歌

十一首

- 2 守宣の頭註はゴチック字体で表記する。

- 3 守宣書人の和歌も、底本の和歌と同様に通し番号を付した上で、

「補○」と併記する。

例えば、17(補4)の場合、

同集 女郎花をよみ侍ける

黒姫

17(補4)をみなへし色めく野邊にあくがれてあはれいくよかた

びねしつらん

- 4 ただし、底本と同じ歌を頭註で重複する場合は表記せず、底本の歌

下部に(補○)と表記し、頭註の内容を( )で後に補足する。

御裳濯和歌集第五(○千載集第四)

題しらず(不知)

- 6 木の葉だに色づく程は有物を秋風ふけばちる涙かな(補1)

(御裳濯集にも 初秋の心をよめる よみ人しらず)

(此歌御裳濯和歌集秋の部の上に 題しらず 荒木田氏良と

あり)

- 5 守宣の朱字以外の註は、(墨書補入)として朱註と区別する。
- 6 守宣頭註内に散見する「御製」は「後鳥羽院」詠のことであるから、その箇所は□で囲むことにする。(後で詳述)
- 7 その他、疑問に思われたり、頭註の内容について誤解を受け易い箇所には「稿者注」として補足する。

翻刻「神宮正権禰宜和歌」

(『神宮典略(十四)』歌之部・宗務・399-5)

- 元満神主一男、家田一祢宜 千載集 新古今集
- 一祢宜荒木田氏良神主作歌 十一首
- 忠成神主一男、岡田 新勅撰集
- 一祢宜正四位上成長神主作歌 四首
- 六 荒木田神主氏實作歌 一首
- 四祢宜隆範神主作歌 二首
- 成長四女 続後撰
- 荒木田成長女作歌 一首
- 一祢宜整定神主作歌 三首
- 俗名荒木田満良神主、元満神主二男 続後撰。西行談抄に、「連阿、千載集に歌一首まじりたれども名字かゝれず。又新古今にもれたり。遺恨なるべけれども、閑におもふに恨なくて和歌を大事として六十餘廻の春秋を、くりき。」

(稿者注。蓮阿が俗名荒木田満良であることを示し、西行談抄の一文を補足)

権禰宜正四位上満良入道蓮阿法師作歌 十一首

作者部類、俗名荒木田成定。按系図、成定神主、成長二男。長延兄千載集

(稿者注。「叢書」では「成定」神主の補註としているが、付されている位置からみて「蓮上」法師の補註。補註の意味は「蓮上」法師が「勅撰作者部類」<sup>3)</sup>では「成定」であるということを伝えるのみ)

六祢宜正四位下成良入道蓮上法師作歌 二首

権禰宜成實入道蓮位法師作歌 二首

(稿者注。「蓮位」法師が荒木田「成實」であるとしているが、その根拠は示されていない。底本の表記には単に「蓮位法師」としか記されており、その表記内容を直ちに信用できない)

定季入道行専法師作歌 三首

権禰宜荒木田神主成實神主作歌 一首

(稿者注。目録には「蓮位法師」と荒木田「成實」との間に「行専法師」(底本では「行専法師」連上法師(蓮上の誤りか))が入っている。もし「蓮位」法師が「成實」ならば、連続して収められていないければ辻褄が合わないことになる。少なくとも、この表記を以て「蓮位」法師が「成實」であるとするのは疑問)

権禰宜従四位上元延作歌 六首

同 従四位上荒木田成延神主作歌 三首

六杵宜満忠神主作歌	一首	権祢宜延秀神主作歌	一首
権祢宜荒木田守方作歌	一首	(稿者注。「御裳濯和歌集では「延秀」ではなく「延季」詠。守宜も「延季」詠として註記。したがって「延秀」に関する「延廣神主二男」以下の補註は不要)	
権祢宜成實女作歌	四首	一杵宜成行神主作歌	二首
荒木田俊長神主作歌	一首	延季神主、家田 新後撰 続千載 新千載 新拾遺	
六杵宜長光神主作歌	十一首	(稿者注。「氏忠」は「延季神主一男」で、脱字あり)	
荒木田有成神主作歌	一首	四杵宜氏忠神主作歌	四首
一杵宜成定神主女作歌	二首	一杵宜尚良神主作歌	九首
六杵宜正四位上荒木田永元神主作歌	四首	六杵宜成言作歌	九首
荒木田實元神主作歌	一首	権祢宜成宗作歌	九首
成長神主二男、岡田 新古今集		権祢宜荒木田長興作歌	九首
権祢宜長延作歌	一首	荒木田氏行神主作歌	九首
荒木田長光乙女作歌	一首	経茂神主二男 玉葉 新統古今	
延(成敷)定神主一男、岡田二杵宜。作者部類、成長(定敷)子		権祢宜経顕神主作歌	十一首
新勅撰集 続後撰集 続古今集 続拾遺集 後撰集		同 定顕神主作歌	九首
(稿者注。「後撰集」は「新後撰集」の間違い。「延成」は「成定」神主一男)		延行(成傍記)神主一男、岡田 新後撰	
二杵宜荒木田延成神主作歌	十六首	(稿者注。「延行」は「延成神主一男」。「延成」が正しい)	
荒木田仲能神主作歌	三首	五杵宜荒木田延行神主作歌	十首
延長神主三男、家田。作者部類、正良子 続後撰集 続古今 続拾遺		氏忠神主一男、家田 続千載 風雅 新千載	
(稿者注。「正良子」は「氏良子」の間違い)		権祢宜氏之神主作歌	三首
一杵宜延季神主作歌	十二首	氏成神主三男、家田 続千載	
延廣神主二男、岡田 続古今			

一 祢宜季宗神主作歌 一首  
 行世神主三男、園田 新千載 権祢宜度會利忠作歌 一首  
 度會生光女作歌 二首

四 祢宜守藤神主作歌 一首  
 行繼神主一男、西川原 新後撰 続千載 新続古今 建久三年二月  
 権祢宜季長作歌 一首  
 任祢宜、嘉元三年卒。

氏繼神主一男、家田二 風雅 一 祢宜度會行忠神主作歌 三首  
 荒木田房繼神主作歌 一首  
 貞常神主二男、檜垣 玉葉 続後拾遺 新千載 新拾遺 正応五年  
 五月廿日任祢宜、元徳二年四月十七日叙従三位、上階始也。延元四年  
 七月廿七日卒、七十七歳。

一 祢宜経直作歌 一首  
 一 祢宜従三位常昌作歌（割注。始名常良、後改  
 作者部類、荒木田之子 新勅撰 続後撰 常昌） 十二首

〔稿者注。守宣の頭註は「寂延法師」が「権祢宜荒木田長延」の法  
 名であり同一人物であることが明らかになる以前の段階で付されたも  
 のなので、別人として補註を付けている。これも守宣に抛る朱書補註  
 が混乱を来している原因の一つである）

右歌人四十四人和歌百九十首

（稿者注。底本には「右歌人四十三人和歌二百首」とある）

一 祢宜朝棟神主作歌 十三首  
 有家神主一男、村松 風雅 嘉元四年三月四日任祢宜、興国四年叙  
 従三位、自吉野帝。延元四年七月廿七日卒、七十八歳。

二 祢宜度會神主興房作歌 一首  
 一 祢宜家行神主作歌 十首  
 五 祢宜度會春章作歌 一首  
 四 祢宜延雄神主二男、河崎 作者部類、一 祢宜常良子 続千載 風  
 雅。権祢宜正〇位上  
 一 祢宜度會氏彦神主作歌 一首  
 一 祢宜家行男、正四位下  
 一 祢宜度會神主雅長作歌 一首  
 七 祢宜盛行神主作歌 十首  
 権祢宜延誠神主作歌 十首  
 一 祢宜度會氏彦神主作歌 一首  
 一 祢宜家行男、正四位下  
 七 祢宜盛行神主作歌 十首

（稿者注。「延誠」は「権祢宜正四位上」が正しい）

四祢宜度會貞蔭作歌 (後改良尚)

九首

(稿者注。底本には「右歌人廿七人百六十八首」とある)

一祢宜貞香神主作歌

九首

五祢宜度會神主延明作歌

九首

度會延良神主作歌

九首

同 秀長神主作歌

九首

同 行俊神主作歌

九首

權祢宜雅蔭神主作歌

九首

同 富行神主作歌

九首

權祢宜度會延親神主作歌

九首

同 雅冬神主作歌

九首

同 朝名作歌

九首

朝泰神主一男、宮後 新後拾遺、一祢宜朝棟嫡孫。

同祢宜朝勝神主作歌

一首

拾玉集第五

教王山三寶院所藏大般若經(第四百六十二) 跋云、応安二年己酉

四月廿五日書之訖。執筆豊宮河東畔、岩淵圖書助度會通詮(七十有

餘)、本名權神主實相。

度會神主通詮作歌

一首

三祢宜、七祢宜盛行男

同 行治作歌

一首

八祢宜度會朝英神主作歌

一首

夫木抄

百首歌の中

右歌人廿七人載歌百六十七首

5 卯の花の波立まよふいなせ川月のやどりや流れ成らん

「神宮正權禰宜和歌」  
 此歌は二宮の祢宜權祢宜の歌ども、中古の撰集其外にもあるを集め  
 記せり  
 ○新古今集(第三) 夏部  
 題しらず(五月雨のこゝろをよめる) 荒木田氏良  
 1 五月雨の雲の絶まを詠めつゝ窓より雨に月を見る(まつ) 哉  
 (御裳濯集に五月雨の歌としてよめるトアリ)

春日拾五十鈴川吉橋良山御百首神感有瑞忽詠三首和歌

一祢宜正四位上荒木田氏良

2 みちといへば君が心に敷島やふるき行旅はいすゞ川波  
 3 しらせばやねがひをみつの長柏なびくにしるし神風の空  
 4 ちりもぬじ清き手向を哀とてそなたになびく神風の声

御裳濯和歌集第五（○千載集第四）

題しらず（不知）

6 木の葉だに色づく程は有物を秋風ふけばちる涙かな（補1）

（御裳濯集にも 初秋の心をよめる よみ人しらず）

（此歌御裳濯和歌集秋の部の上に 題しらず 荒木田氏良とあり）

鹿の歌とてよめる

7 武士のたちし野原の秋風に残るを鹿の夕暮の聲

百首歌の（「の見せ消ち」）中に

8 風わたる野原の真葛葉をしげみ恨み多かる秋の夕ぐれ

虫（歌とてよめる）を読侍にける

9 我宿は人とふこともなき物をいつならひける松虫の聲

九月十三夜の（「の見せ消ち」）月を見てよめる（よみ人しらず）

10 秋の月ちゞに心をくだき来て今宵一夜にたえずもあるかな

（補2）

（○千載集）

（千載集第五 十三夜のこゝろを読む よみ人しらず）

（御裳濯集に 九月十三夜の月を見て読む 荒木田氏良と記せり）

此歌は千載集に読人しらずとあり（墨書補入）

百首歌の（「の見せ消ち」）中に

11 月かげに野中の庵はほの見えて尾花の末に衣打なり

御裳濯和歌集

荒木田成長

九月尽の心を

12 けふのみと秋の名残を思ふにも馴てくやしき夕暮の空

題不知

13 いにしへに色もかはらぬ梅の花あるじからにや人もこひこぬ

社頭にてをのく山初花といふ事をよみ侍ける

14 神路山峯の桜は咲にけり日ごろも見えぬ雲の色かな

○新勅撰集

題不知

15 かきつむる神路の山の言の葉を空しく朽ん跡ぞ悲しき（補3）

（○新勅撰集第十七）

（文治の比ほひ、千載集えらび侍し時よみ侍ける 荒木田成長）

御裳濯和歌集

荒木田氏實

16 時鳥まつにしろしるしのなきかとして尋ぞきつる三輪の杉村

題不知（墨書補入）

同集 女郎花をよみ侍ける

黒姫

17 （補4）をみなへし色めく野邊にあくがれてあはれいくよかたび

ねしつらん

同和歌集

荒木田隆範

題不知 (墨書補入)

満良入道蓮阿

(女郎花をよみ侍ける)

- 18 女郎花わする、名をたてしとて昨日の野邊にけふも来にけり  
 19 夕風のさびしきまゝに花薄とまらぬ人を猶まねくかな

続後撰集 雑 (第十六)

(題しらず)

荒木田成長女

題不知 (墨書補入)

- 26 山風にまづたぐふなり花よりも猶はかなきや匂ひなるらん  
 (蓮阿法師 俗名満良。千載集ニモ満良、右西行談抄ニミエタリ)  
 27 桜花盛になればしら雲のたえまぞかすむ三吉の、山  
 28 友とするおりしもあらむ山風を花ゆゑいたく恨みつるかな  
 29 いづみ川すゝむ此夜は明ぬらし遠方波の岩こゆるみゆ

- 20 物思ふ袂に似たる紅葉かな時雨や何の涙なるらん  
 (直云 萬代集ノ秋二題不知 読人不知トテ此歌ヲ載ス)

拾玉集第五

荒木田神主成定

を)

- 30 小山田の稲葉わけきてほのかにも音づれ初る秋の初風  
 なげくこと侍けるころよめる (墨書補入)  
 31 忍ばる、昔にかへるよなりともかなしかるべき秋の夕ぐれ  
 山月といへるころをよめる

春日拾五十鈴河吉橋良山御百首の時詠三首

- 21 神垣や百枝の松に契り置言の葉ごとに恵あるべし

- 22 敷島やみちくる塩の大淀やみるめもあかずあまの釣船

- 23 榊葉のさしてぞ祈る思ふことならずはあらじ五十鈴川波

同集

おなじ時詠三首和歌

権祢宜正四位上満良

- 24 七そぢにかゝる波路の浜荻の朽ばの身にもあかぬ言の葉

- 25 神風もさぞおもふらん幾春も匂ひおこせよ志賀の花園

御裳濯和歌集

題不知 (墨書補入)

- 32 はれやらぬ雲は吉野のよそめにて高間のおくぞ月ぞすみける  
 物へまかりて侍けるに、何となく故郷思ひやられるに  
 月いとあかく侍ければ、「月いとあかく」以下、墨書補  
 入)  
 33 うた、ねの夢をもまたじうつ、にも月はさやかに故郷の空  
 34 行秋のさそはゞいなんと思ふこそ別れんよりもかなしかりけれ

- 続後撰集第十八  
 出家の後よめる  
 蓮阿法師
- 35 (補5) そむきぬといふばかりにや同じ世のけふぞ心に遠ざかる  
 らむ  
 新後撰集第九  
 題しらず  
 寂延法師
- 36 (補6) 紅葉ばのあけの球がき幾秋のしぐれも雨に降りぬらむ  
 新勅撰集第十二  
 恋歌読侍けるに  
 寂延法師
- 37 (補7) はるがすみたなゝし小船入江こぐをとをのみきく人を恋  
 つゝ  
 新勅撰集第十六  
 題しらず  
 寂延法師
- 38 (補8) 幾秋をなれても月のあかなくにのこりすくなき身をうら  
 みつゝ  
 新勅撰集第十六  
 年の暮の心を読侍ける  
 寂延法師
- 39 (補9) 筏士のこす手につもる年なみのけふのくれをもしらぬわ  
 ざ哉  
 新勅撰集第十九  
 寄露恋をよめる  
 寂延法師
- 40 (補10) しのぶ山木の葉しぐるゝ下ぐさにあらはれにける露の色  
 かな  
 続後撰集第五  
 薄を  
 寂延法師
- 41 (補11) 武士のやた野のすゝきうちな引をじか妻よ(とイ) ぶ秋  
 は来にけり  
 続後撰集第十二  
 題不知  
 寂延法師
- 42 (補12) 逢こともたがためなれば玉のをのいのちもしらず物おも  
 くらむ  
 (寂延法師、俗名荒木田満良神主。作者部類、荒木田之子)  
 (稿者注。「寂延」の俗名がこの時点で不明で、荒木田満良かとし  
 ている)
- 43 深草やうづらなく野の夕暮をとへかし人の秋は来にけり  
 (稿者注。御裳濯和歌集では単に「蓮位法師」とあるのみ。目次と  
 共に「成實入道」が「蓮位」とする根拠は示されていない)  
 二見百首歌中に(墨書補入)  
 成實入道蓮位
- 44 女郎花は山が裾に木がくれて独も秋を涼(すぐイ)しがほなる  
 同集  
 題不知(墨書補入)

45 (補13) 春の夜の明行風にさそはれて谷のと出る鶯の聲  
蓮位法師  
題不知

伊勢にたてまつらせ給ける二百首の御製の中に

蓮位法師

46 (補14) 谷風の鶯さそふたよりにや山ざと人の春をしるらん  
47 (補15) 鶯のはね白妙のあは雪をきえねと春の風は吹つ、  
(稿者注。御製は「後鳥羽院」の詠作)

同集

定季入道行專

柳の歌とてよめる 行專法師、俗名定季 (墨書補入)

48 朝みどり霞に染る青柳のはなだの糸に春風ぞ吹

49 立かへり春になぐさむ心こそよに故郷の名残なりけん (補16)

(世にのがれて修行に出て年へてはるごろもとすみ侍ける所に帰

まうできて花をみてよみ侍ける 行專法師)

題不知 (墨書補入)

50 昔にもかはらぬ秋の月を見てあらましかばの人ぞ恋しき

同集

(二見百首歌中に) 藤袴をよめる

連上法師

51 藤袴秋の野もせに立霧の絶間に見れば綻びにけり

旅宿落葉といふことをよみ侍ける (墨書補入)

(稿者注。御裳濯和歌集により、「連上」は「連上」の誤り)

52 木の葉ちる外山の里に旅ねして夢も嵐にさそはれにけり  
二見百首歌中に (墨書補入)

53 から衣打手やたゆくなりぬらんふくればすさむ槌の音かな

千載集第十九

神力品、如日月光明能除諸幽冥の心を読む 蓮上法師

54 (補17) 日のひかり月の影とぞ照しけるくらき心のやみはれよとて

同集

花の歌とてよめる

権祢宜成實

55 ちらば又物や思はん山桜花にかぎらぬ浮世なれども

(稿者注。『叢書』では43番歌の前に「権祢宜成實」として翻字されてはいるが、御裳濯和歌集では「成實女」の詠作となっている)

拾玉集

吉橋良山百首の時

従四位上荒木田元延

56 色染て幾しほ深し難波津やけふ神垣に匂ふ此花

57 哀みのためしはそれぞ神路山見ゆらん物を面影の空

58 神垣やおのがときはに成ぬらんけふの手向を松風の聲

御裳濯和歌集

題不知 (墨書補入)

59 里はあれて思ひも霧も深草や我身うづらの鳴かひもなし

(霧中女郎花といふこゝろをよめる)

60 女郎花何ゆゑ我を隔つらん霧のまがきのSきの夕ぐれ

虫をよみ侍ける (墨書補入)

61 浅ぢふの露になくなるきりぐす聲も夜寒に秋風ぞふく

伊せにたてまつらせ給ける二百首御製の中に (墨書補入)

62 (補18) 高原の尾上のみやをあれぬともしらでやひとり松虫の

聲 (墨書補入)

(稿者注。御製は「後鳥羽院」の詠作。初句「たかまどの」)

拾玉集

吉橋良山御百首の時 従四位上荒木田成延

63 手向まで詞の花に色そへて桜の宮にめぐみあるらし

64 吹をくる手向の風のことほりになびくもうれし伊勢の浜萩

65 頼らん心の空はくまもあらじてらせ神路の山のはの月

(稿者注。「成延」は「延成」の誤り。伊藤正雄『伊勢の文学』(昭29)に拠る)

御裳濯集

行路霞といへる事を 荒木田満忠

66 東路や霞も草もはるぐと同じみどりを武蔵野の原

同集

雪中女郎 (「郎」墨書補入) 花といふ心を (よめる)

荒木田守方

67 咲しよりめかれぬ物を女郎花いかなる霧の立隔つらん

郭公をよめる

寂延法師

68 (補19) 郭公待夜いたくもふけにけり山のはちかく月はのこりて

田家秋近といへる心をよめる

寂延法師

69 (補20) 夕すゞみ門田のおもに吹風の音にもちかく秋はきにけり

伊勢にたてまつらせ給ける二百首御製中に 寂延法師

70 (補21) みだれあしの下葉すゞしくつゆはゐて野ぎはの吹にか

よふ秋風

(稿者注。御製は「後鳥羽院」の詠作)

同集

題しらず (「しらず」に見せ消ちで「不知」)

成實女

71 春来ても猶かきくもりしら雪の故郷寒しみよしの、山

題不知 (墨書補入)

72 石上ふるきは花も哀なり我身につもる春をおもへば

花歌とてよめる (墨書補入)

73 ちらば又物や思はん山桜花に限らぬ浮世なれども

(稿者注。『叢書』では「権祿宜成實」詠とする54番歌と同じ)

紅葉をよめる (墨書補入)

74 山めぐり夜寒の衣うす紅葉しぐる、秋を人のとへかし

伊勢にたてまつらせ給ける二百首の御製中に

荒木田成實女

75 (補22) 春のきてなほふる雪はきえあへず杉の葉しろき三わの

あけぼの

(稿者注。御製は「後鳥羽院」の詠作)

此歌成實女ノ春きてもの次にあり。同人八名をしるさぬ此集の定めなれば、是も成實女のうたなるべし (墨書補入)

御裳濯集

和歌所にて春山月といふ心をつかふまつりける

越前

76 (補23) 山ふかみなほかげさむし春の月そらかきくもり雪はふりつ

伊勢にたてまつらせ給ける六十首の御製の中に

越前

77 (補24) みよしの、霞つれなき山のはをわけてもいづる春のよの月

(稿者注。御製は「後鳥羽院」の詠作)

伊勢にたてまつらせ給ける六十首の御製の中に

(墨書補入)

78 (補25) しぐれつ、みやま色づく山おろしなみだあらそひちる

このは哉

(墨書補入)

(稿者注。御製は「後鳥羽院」の詠作)

同集

三月尽の心をよめる (墨書補入)

荒木田俊長

79 行春を我のみをしむけふならばうき身からとや詠かねまし

同集

題不知 (墨書補入)

荒木田長光

80 みよしのは空まで花の色なれや桜にかゝる峯のしら雲

(水邊花といふことをよめる)

81 棹つと姫の袖よりあまる花の香のみもすそ川に匂ふ夕かせ

題不知 (墨書補入)

82 をのづから咲をくれたる花をだに心とちらせ春の山かせ

題不知 (墨書補入)

83 時鳥常盤の山はおのれもや鳴て五月の空をしるらん

(花橘歌とてよめる)

84 いにしへも猶むかしたや匂ひけん五月わすれぬ軒の立花

- 85 鶺鴒かひ船はやせをくだす篝火の跡にともえて飛螢かな  
 (題不知)  
 雨後のはぎといへる心を(よみ侍ける)
- 86 庭のはぎしほれてをける朝霧に跡もかくれぬ夜半の村雨  
 雁歌とてよみ侍ける(墨書補入)
- 87 鳴てゆく雲居の雁の聲寒み浅茅色づく野邊の夕霧  
 月の(「の見せ消ち」)歌とてよめる(「める」左に「み侍ける」)
- 88 嵐山さぞ群雲をはらふらん更行まゝにすめる月かけ  
 駒迎をよみ侍ける(墨書補入)
- 89 霧原の駒ひく宵の空はれて月も出けり逢坂のせき  
 (第五句「せき」に「山一本」)  
 擣衣をよめる(墨書補入)
- 90 山里は夜寒のあらし吹かさねちたびやいそぐ衣打声
- 91 松風の音ばかりする山里に独ぞ月は見るべかりける  
 (稿者注。この歌の作者は御裳濯和歌集に拠れば荒木田「延成」。  
 『叢書』にも同じ 頭註あり)
- 92 (補26) みよし野やむらぎえのこるあは雪のしたぐさかけて春風  
 題不知  
 同集  
 寂延法師
- 93 百首歌の中に  
 ぞふく  
 (補27) ふじの根やつれなき雪も時しあればしたには春をおもひ  
 ひしるらん  
 題不知  
 寂延法師
- 94 (補28) 鶯の聲せぬ野邊はなきものをいかにつむべき若なゝら  
 ん  
 題不知  
 寂延法師
- 95 (補29) 春霞たてるがうへにみよしのゝよしのゝ雪はなほもふり  
 つゝ  
 梅をよみ侍ける  
 寂延法師
- 96 (補30) 梅の花さくや春邊のあさばらけなほふる雪に色はまがひ  
 ぬ  
 ○旅二載ス(墨書補入)  
 すみける山ざとの花みるべきよしいへりける人まうで  
 こざりければ、つかはしける  
 寂延法師
- 97 (補31) かずならぬ身はたのめしもたのまれず花をよするがに君  
 をこそまて  
 花歌とてよめる  
 寂延法師
- 98 (補32) うつせみのよしなき花になれきつゝむなしきいろに年の  
 へにける  
 題不知  
 越前

- 99 (補33) 山里にはよりほかのみちもがな花ちりぬやと人もこそ  
とへ  
寂延法師
- 100 (補34) 天川紅葉の橋やみだるらん秋風ふきぬ夕暮のそら  
題不知  
寂延法師
- 101 (補35) ものゝふのやたのゝすゝきうちなびきをじかつまどふ  
秋はぎにけり  
(稿者注。41番歌と同一)  
海邊秋風といふ心をよめる  
寂延法師
- 102 (補36) とふ人もなぎさのとまやあれはてゝあしのはそよぎ秋  
風ぞふく  
雁歌とてよみ侍ける  
寂延法師
- 103 (補37) かどたふく風のけしきをおもふまにおとづれゆくは  
つ雁の聲  
題不知  
越前
- 104 (補38) 秋はたゞ心よりおく夕露を袖のほかにもおもひけるかな  
同  
寂延法師
- 105 (補40) そでのうへの霧はなみだのおくものをしりがほにふく  
野邊の秋風  
題不知  
寂延法師
- 106 (補41) いく秋をなれても月のあかなくにのこりすくなき身を  
うらみつゝ  
海浜重夜といへる心をよみ侍ける  
越前
- 107 (補42) いくよかは月をあはれとながめきてなみにをりしくい  
せのはま菰  
題不知  
黒姫
- 108 (補43) きゝわたるなのみなりけりくらはしの山もさやかにす  
める月かな  
同集
- 109 あくがれて幾よになりぬ草枕空に馴ぬる月にとはゞや  
旅月といへる心をよめる (墨書補入)  
荒木田有成
- 110 いづくともしらぬ山路の花のかにさそはれ出る春の明ぼの  
時鳥 (見せ消ちで「郭公」) をよめる  
成定女
- 111 里かれずこととふばかり時鳥まつはくるしといかでしらせむ  
(荒木田成定女)

同集

題不知（墨書補入）

荒木田永元

115 我宿の梅の匂ひやしたふらん遠かた人の行もやらねば

花橘歌とてよめる

116 あはれなる花立花の匂ひかな昔に似たる宿もなき世に

（題不知）

117 秋来ぬといはぬばかりぞ萩のはに夕風わたる岡野邊のさと

月歌とてよめる（墨書補入）

118 見るたびや心のみやくだくべきなくさめもせよ秋の夜の月

同集

水邊の山吹といへる心をよみ侍ける（よみ侍ける「墨

書補入）

荒木田實元

119 山吹のうつれるかけをみな底に波の折しく花かとぞ見る

新古今集（第十八）雑

題しらず

荒木田長延

120 つくぐぐと思へばやすき世の中を心と歎く我身なりけり

（稿者注。底本著者の蘭田守良及び頭註者の蘭田守宣共に「長延」が「寂延法師」と同一人物とする研究史以前なので、そういう認識の配列になっていない）

御裳濯集

題不知（墨書補入）

長光乙女

121 ゆく秋のかたみにひろふ紅葉はを袖にもためず吹嵐かな

題不知

寂延

122 （補44） あだしの露ともしらで月影のやどる草葉を秋風ぞ吹

123 （補45） 秋の月袖にはいかにくもるらん野はらもおなじ露のよ

すがを

旅月といへる心をよめる

寂延

124 （補46） ふるさとのそらまですめる心哉たびねふけ行月をながめ

て

二見百首歌中に

寂延法師

125 （補47） 月はすむまがきの虫はすだく也いづれか宿のあるじな

るらん

126 （補48） 心さへあれゆく宿のつまなれやのこるくまなく月のす

むらん

127 （補49） いづかたのやまのおくにかおもひいでんあはれなるべ

きふるさとの月

（稿者注。122～124の三首は天理本『御裳濯和歌集』では「寂延」詠となっている）

伊勢にたてまつらせ給ける二百首御製の中に 成定女  
 125 (補50) 郭公まつよひながらあけぬなりさもあらぬ鳥のねのみ  
 きこえて  
 (稿者注。御製は「後鳥羽院」の詠作)

世をのがれて山ざとに侍けるに月をみて

寂延法師

126 (補51) うきよをばしはしとおもふ山里に行末かけてすめる月かな

昔を(一)を「見せ消ち」おもひいでられて

127 (補52) いにしへの秋こそさらにこひしけれどもにくもる月

をみるにも

128 (補53) ながめじとおもふにつけてむかしのみわすれがたみの

秋のよの月

月歌とてよめる

寂延

129 (補54) わするなよ月よりほかにともはあらじ野にも山にもす

む身なりとも

130 (補55) 秋のよはおもひやられぬくもぞなきとらす野邊も月

はすむらし

月歌とてよめる

越前

131 (補56) うづら鳴くにはのあさぢに月さえて秋のあはれはふか

くさのさか

暁搗衣といふことをよめる

寂延法師

132 (補57) とりのねも野中のさとはとほければあくるもしらさず衣打也

二見百首歌中に

寂延法師

133 (補58) いまさらに庭のあさぢをわけそめてとへとはたれをま

つむしの聲

題不知

寂延法師

134 (補59) 秋の行すそのゝみちのしるべして花吹わたる山おろしの風

帰雁をよめる

寂延法師

135 (補60) 帰る雁しほりもみえぬ大ぞらにいかにこしちをわすれざ

るらん

花歌とてよめる

136 (補61) 高原のみやの桜も咲にけりしらぬ昔の春ぞこひしき

題不知

寂延法師

137 (補62) 吉野川ながるゝ花の白波のはやくもすぐる春の暮かな

○新古今集雑

二祢宜荒木田延成

138 八重榊しげき恵みの数そへていや年のはに君を祈らむ(補63)

(新勅撰集第九)

(述懐の歌よみ侍けるに 荒木田延成)

○続後撰集(第十二) 恋

(恋(「のイ」)歌の中に 荒木田延成)

139 せきかぬる涙の川のうき枕うきてみなはのよるぞけぬべき

(続後撰集第十七 荒木田延成)

月の歌の中(に) 雑

- 140 老にける身にこそかこて秋の夜の月見るたびにもくもる涙を  
 ○統古今集(第七) 神祇  
 (神祇の歌の中に 荒木田延成)
- 141 祈置し我かね(き)言のいやましにさかゆく御代は神ぞしるらん  
 ○統拾遺集(第八) 雑秋  
 (初秋風といふことを 荒木田延成)
- 142 色毎にうつろひゆけばいかせんなびく浅茅の秋の初かぜ  
 (○統拾遺集第二十)  
 神祇を(題しらず 荒木田延成)
- 143 濁りなき御代の流の五十鈴川波も昔に立帰るらむ  
 新後撰集(第十) 神祇(墨書補入)  
 (題しらず 荒木田延成)
- 144 榊もて八つの石つばふみならし君をぞ祈る内の宮人  
 御裳濯和歌集  
 題しらず(「しらず」に見せ消ち)
- 145 足引のこなたかなたを尋ね来て山のかひある花を見る哉  
 題不知(墨書補入)
- 146 花さそふ風のたよりにをのづから春の色しる谷の埋木  
 題不知(墨書補入)
- 147 吹まよふ夜半の嵐の山ざくら明なばなげのかけぞかなしき  
 題不知(墨書補入)
- 148 をのづから新やかよふ時鳥宿の梢の過がての声  
 (題不知)
- 149 初秋は時雨もまたじ天の川もみぢの橋をいかにそめけん  
 (月歌とてよめる)
- 150 常磐木につれなき色も置露に宿かる月の秋は見えけり  
 (題不知)
- 151 山のはのをくりむかへて見る月の我身につもる秋ぞかなしき  
 題不知  
 荒木田延成
- 152 (補64) 松風が音ばかりする山里に獨ぞ月を(「を見せ消ちで  
 「は」)みるべかりける  
 題不知(墨書補入)
- 153 をのづから涙のよそに詠めばや空はくもらぬ秋よの月  
 擣衣をよめる(墨書補入)
- 154 ふけにけり遠里小野の秋風に夫かとはかり衣うつこゑ  
 同集  
 荒木田延成
- 155 詠めじと思ひすて、もいかせんうつろふ花の夕暮の空  
 題不知(墨書補入)
- 156 尋けん心ぞつらき山桜ちりぬとばかりさかまし物を

続後撰集(第九) 神祇

太神宮(の)一称宜にて年久敷つかへ

まつる事を思ひてよめる

荒木田延季

157 しばしだに立もはなれず瑞垣の久しかるべき御代祈るまで

(○続後撰集第九)

神祇を

(題しらず 荒木田延季)

158 神路山峯の朝日の限なくてらす誓や我君のため

○守宣補フ

続古今秋下 荒木田延季

159 (補65) 紅葉はのちるをぬさとや手向らん嵐吹なり神なびの杜

(稿者注。『叢書』では作者名を「荒木田延季」とするが、御裳灌

和歌集は「延季」詠。守良が「延秀」としたものに守宣が「延季」

として訂正)

続古今集(第七)

文永二年八月十五夜、内宮の御柱立

にあたりて侍(ければ読る)りければ

よめる

(荒木田延季)

160 宮柱立る今宵の夜の月又幾度かめぐりあふべき

○続拾遺集(第八) 雑秋

(冬歌の中に 荒木田延季)

161 袖ぬらす物とはきけど慎の屋に過るはをしき初時雨哉

(○続拾遺集第二十)

社頭月といふ事(見せ消ちで「こと」を

荒木田延季)

162 跡たれて郁代へぬらん朝熊やみ山をてらす秋の月かけ(「月かけ」

に「よの月イ」)

新拾遺集(第十六) 神祇

(神祇歌の中に 荒木田延季)

163 神もさぞあかず見るらん桜ちるしめの宮守朝清めすな

拾玉集

吉橋良山百首の時

164 月影のさしも神路の山べには住むかひあれやけふの圓居は

165 ためしぞとけふの手向に色そへて朝日もうつる神垣の空

166 神路山君が手向を松が枝にかさねてなびく雲の白ゆふ

御裳灌和歌集

夏歌とてよめる

167 しばしとて詠むる程のやすらひにはかなくあくる夏の夜の空(「

夜の空」墨書補入)

(月歌とてよめる)

168 まつ人のあらば心をつくさましまし月すむ宿の荻の上かせ

続古今集(第十六)

(題しらず)

荒木田延季

169 紅葉はのちるをぬさとやたむくらむ嵐吹なり神なびの杜(159番

歌と同一)

(稿者注。藺田守良は「延秀」とし、守宣も「目録」の該当箇所  
に「延廣神主二男、岡田 続古今」の頭註を付しているが、『叢書』  
校訂者が「延季」詠と訂正)

○新後撰集第十

題不知 よみ人しらず

170 (補66) 神路山ひくしめ縄の一すちにたのむちぎりは此世のみかは

此歌姓名をしるされずといへども、嘉元二年十一月十一日に  
延行神主父延成爲に作れる遺稿に、被撰入新後撰和歌両首中  
といひて、此歌を載られたり。是によりて今こゝに是をのす  
守宣云、此歌、廿一代集抜粹伊勢神宮作者ト題セシ書ヲ以テ  
載る。但荒木田延季ノ次ニ載セアルニ依テ此所ニ記スト雖  
モ、右延行神主父延成ノ為ニ作ル遺稿トアレバ、作者延成神  
主ノ歌歟(墨書補入)

(稿者注。『廿一代集抜粹伊勢神宮作者』が如何なるものか未詳)

御裳濯和歌集

題しらず (「しらず」に見せ消ちで「不知」)

荒木田成行

171 村雨の過るを野邊の雲間より山時鳥声もらすなり

題不知(墨書補入)

172 木のまもる月より外の友もなし楨たつ山の椎柴の庵

成行(墨書補入)

伊勢にたてまつらせ給ける二百首御製中に

173 (補67) ぬれつゝやひとりゆくらん時鳥とばたのおもの雨の夕暮

伊勢にたてまつらせ給ける二百首御製中に

174 (補68) 誰みよと人も音せぬ奥山の楨のはわけにひとりすむ月

(稿者注。御製は「後鳥羽院」の詠作)

新後撰集(第十二) 雑

荒木田氏忠

(題しらず)

175 をくれじと思ふ心やなき人のまよふ闇路の友と成らむ

続千載集(第九) 神祇

(題しらず 荒木田氏忠)

176 神路山かげの小草は萌にけり末葉ももれぬ春の恵に

新千載集(第十)

都にのぼりて月を見てよめる

(荒木田氏忠)

177 我たのむ神路の山を出るより身をはなるべき月の影かは

○新拾遺集(第九) 別

(題しらず 荒木田氏忠)

178 ふり捨て誰かは越む鈴鹿山関屋は夜半の月ももりけり

伊勢新名所歌合 大納言為世卿判あり(墨書補入)

桜木里 一 柘宜尚良

179 朝熊や神代より咲花を見て心ぞとまる桜木の里

泉水杜

180 五十鈴川ながれ涼しく成にけり清水の森に通ふ秋かせ

岩波里

181 ぬれてこそ光りもまされ行秋の月に宿かせ岩波の里

打越濱

182 蟹の住友とやは見る波あらし打越の濱の冬の夜の月

藤波里

183 契り置春は来て見む松が枝の千とせにかゝる藤波の里

河邊里

184 住人や暮れば窓にあつむらん河邊の里に飛蟹かな

岡本里

185 「(本文欠落)」また打もねぬ岡本のさと

三津湊

186 夢なれやみつの湊のうき枕波のうつゝにとふ人もなし

大沼橋

187 わたらひや大沼の橋もとだへせず秋田かりあげ治まれる世は

同歌合

柘宜荒木田成言

188 尾上より麓をかけて桜木の名にあふ里(あふ)にかほる春風

189 影きよき清水の森のしたはれて鳴音涼しき時鳥かな

190 詠めつゝ、ねぬ夜の月の影ふけて河音高し岩波の里

191 沖津風塩干を遠み月さえて浪も音せぬ打越の濱

192 春深きままきの小野の浅ちふに松原こめてかゝる藤波

193 湊人の河邊のまこもこす波に里かたかけて飛蟹かな

194 瀧なみの山越にきく鹿の音にね覚わひしき岡本里

195 我袖ぞみつの湊をいる船のよするばかりに浪はかけける

196 明ぬとて庵もる賤や帰るらん大沼の橋をわたる里人

同歌合

権柘宜成宗

197 桜木の名におふ里の春風に折らぬ袂も花の香ぞする

198 風通ふしみづの森の松かけに聲も涼しきほとゝぎすかな

199 月すめば打ぬる程の夜半もなし河音高き岩浪の里

200 打越の波にしばなくさよ千鳥濱風さむみ友したふなり

201 里人や千とせをかけて契るらん松に花さく池の藤なみ

202 五月雨にけたぬ思ひも程見えて河邊の里にもゆる夏むし

203 岡本の里は外山の近ければ聞馴にける棹鹿のこゑ

204 よそにのみ人をばみつの湊船うきてこがるゝ恋ぞ苦しき

205 立渡る大沼の橋の朝霧に行来の人や道まよふらん

## 同歌合

権柄宜荒木田長興

- 206 花の香を霞みこめても桜木の里とはしるし匂ふ春風  
 207 待人の心くみてや時鳥しみづの森に初音啼らむ  
 208 月も猶住こそまさされ宮川や清き流の岩波の里  
 209 打越の濱松がえは浪かけて雪げにさゆる沖津塩かせ  
 210 幾千代を松に契りて藤波の里のあるじも春を経ぬらむ  
 211 水まさる河邊の里の五月雨に入り江もちかくよする船人  
 212 岡本の里隔つる秋霧に妻をこめてや鹿の鳴らむ  
 213 いつかきて三津の湊のしほれ芦のねになきぬらす袖もほすべき  
 214 朝霧の立や大沼の浮橋のうきて思ひも晴るまぞなき

## 同歌合

権柄宜氏行

- 215 里人もたのめし春と桜木の花咲ころや我を待らん  
 216 初音なく清水の森の時鳥ぬれてもきかん村雨の空  
 217 松に吹秋の河かせ音さえて月すみわたるいはなみの里  
 218 打越の濱風あれてよる湊にやどり定めぬ冬の夜の月  
 219 此里のあるじや折てかざすらんちとせの春を松の藤なみ  
 220 さびしさも誰かとふべき水まさる河邊の里の五月雨の頃  
 221 時雨つゝ紅葉かつちる岡本の里もさびしく打衣かな  
 222 ほのかなる三津の湊のいさり船幾世こがれて恋わたるらん

223 浮事は大沼のはしに立霧のはれぬ思ひに世をわたる哉

## 同歌合

権柄宜経顕神主

- 224 おのづからまじる梢も埋れてさながら花の桜木のさと  
 225 手に結ぶ清水の森の時鳥あかぬはおのが鳴音のみかは  
 226 影やどる月も夜寒の秋ふけて河音さびし岩波の里  
 227 霜きゆる汀の真砂きわ見えて跡なる波の打越の濱  
 228 咲かゝる木々の梢もをしなべて同じ名にたつ藤波の里  
 229 夕されば河邊をかけてこす塩に里も涼しく松風ぞ吹  
 230 岡本の里も夜寒に時雨れつゝ紅葉がさねの衣打なり  
 231 またいつか三津の湊のうき枕夢にも結ぶ契りなるべき  
 232 うき事は大沼のはしの朝霧に猶立まよふ世をやわたらん

## 同歌合

権柄宜荒木田定顕

- 233 春といへばよそにもしるく桜木の花こそ里の名にたてりけれ  
 234 夕すゞみしみづの森の時鳥影をば手にも結び馴れり  
 235 いねがてに月みよとてや秋風に聲打そふる岩浪の里  
 236 風はやみ浪打こしの濱あれてしば啼千鳥かたも定めず  
 237 末長く松にむかひの里までも咲かゝりたる岸の藤波  
 238 水まさる河邊の里の五月雨にからぬまこもは波ぞ敷ける  
 239 風よはるそものならに音そへて時雨降なり岡本の里

240 ほのかにも人をばみつの湊江におきふし芦の音こそなかるれ  
 241 霧深き大沼の堤行くれて渡りわづらふ槇の継はし

同歌合

柗宜荒木田柗宜延行

242 桜木を梢に見せて咲にけり花もや里の名をばしるらん

243 影をだにむすびもとめぬ時鳥清水の森に鳴過ぬなり

244 幾秋の月やどりきて岩波の立よる里に名をとゞむらん

245 伊勢鳴や浪の打越に月さえて塩風あらき冬の濱荻

246 此さとに幾千代かけて藤波の花さく松も春を経ぬらん

247 浦近き河邊の里のなびき藻に入塩見せて飛螢かな

248 岡本のすそ田に秋の雁鳴て夜深き里に衣うつなり

249 くれねたゞおなじ湊のかたし貝みつといひてもあはぬ名ぞうき

250 明わたる霧の晴間にとだえして大沼橋をふるす秋風

○新後撰集(第十二)

恋の歌の中に

(荒木田延行)

251 思ひ川いつまで人になびきもの下に乱れて逢せ待らん (補69)

／重複(墨書補入)

(新後撰集第十二 恋の歌の中に 荒木田延行)

続千載集(第十五) 恋

荒木田氏之神主

(恋歌の中に 荒木田氏之)

252 うき人の心のたねの忘草いつ我中にしげり初めけむ

風雅集(第十九)

社頭の(「の見せ消ち) 月を

(荒木田氏之)

253 すむ月も幾とせふりぬいすゞ川とこよの浪の清き流に

新千載集(第十)

神祇を(「を」に「歌に」)

(荒木田氏之)

254 幾秋を送りむかへて神路山月も天てる光なるらむ

玉葉集(第二十)

神祇に(題しらず)

荒木田経顕神主

(此人系二見エズ。糺スベシ)

255 曇り(「り」見せ消ち)なく(「く」に「き」)今もますみの鏡とは

天照空の影にもしれ

新続古今集(第十七) 雑

(題しらず 荒木田経顕)

256 初瀬山月に淋しき鐘の音をひ原におくる夜はの山(「あき」)風

(稿者注。255・256番歌共に『叢書』にナシ。その理由は不明)

続千載集(第十二)

恋の(「の見せ消ち) 歌の中に

荒木田季宗

257 いかゞ(「ッ」見せ消ちで「に」)せんあはでの浦による波のよる

だに人を見る夢もがな

新千載集（第十）

神祇を（題しらず）

荒木田守藤

258 水上は深き神路の山ぞともみもすそ川の流にぞしる

新葉集

荒木田季長

259 我袖に涙もいつか春の夜の霞むを月のならひとも見ん

風雅集（第十九）

神祇の歌の中に（題不知）

荒木田房継

260 ふして思ひあふぎて頼む神路山深き恵をつかへてぞまつ

○新後拾遺集（第十九） 神祇

荒木田経直

（題不知）

261 五十鈴川瀬々の岩波かけまくもかしこき御代と猶祈る哉

御裳濯和歌集

（行路霞といへる心をよみ侍ける）

度會神主興房

262 旅衣いくへの露わけつらん今ゆく末は（「は」見せ消ちで「も」）

武蔵の、原

同集

題不知（墨書補入）

度會春章

263 桜さく山とび越て帰る雁くもがくれゆく心ちこそすれ

同集

題しらず（「しらず」みせけちで「不知」）度會神主氏彦

264 あはれいかに吉野の奥に住人の心のまゝに花を見るらん

同和歌集

題しらず（不知）

度會雅長神主

265 秋風は野邊のあさぢ（「あさぢ」に「あるじ」）にあらはれてちゝの草はのなびかぬぞなき

伊勢にたてまつらせ給ける六十首御製中に

266 （補70） あさ露のをかかやはら山風にみだれてものは秋ぞか

なしき

（稿者注。御製は「後鳥羽院」の詠作）

同

題不知（墨書補入）

度會神主利忠

267 思ひやれあれたる宿の寂しさに松吹風の秋の夕ぐれ

（題不知）

度會生光女

268 をのづから花の折のみとふ人の心の色をいかたのまん

（卯花をよめる）

269 卯の花のさくやみ山の夕月夜この下かげも残らざりけり

題不知

従三位常昌

○新後撰集(第十)

神祇を(題不知 度會行忠)

祢宜度會行忠神主

270 曇りなき天照神のます鏡昔を今に移してしかな

276 これやこの天照神の天地をまもるしりの千木の片そぎ

○統千載集(第九) 神祇

おなじ意を(題しらず 度會行忠)

271 皇のあまの(すへらぎの天の(「の」に「つイ」) 御祖のみこと

外宮北御門歌合(割注。元享元年冬、判者小倉中納言入道公雄)

のり傳て折る豊の宮人

落葉

○新統古今集(第十)

旅(の歌の中に 度會行忠)

272 旅衣すその、尾花露分て袖に乱る、月のかげ哉

278 木葉のみ荒木田氏の音に時雨れ来てくもらぬ空にさゆる月かな

○玉葉集(第十)

恋の心を(題しらず 度會常良)

273 逢事の空しき名のみ残し置て身はなき数に聞やなされん

280 つれなさもはてしあらばと頼む身の心長さや命なるらん

○統後拾遺集(第二十) 神祇

(題不知 度會常良)

274 民の為世の為祈る神わざのしげき御国は猶ぞさかえん

282 つらさをもたへて命のながらへば世にためしある恨とやせん

○新拾遺集(第十六)

恨恋

山家松

詠九首歌合に

283 とふ人は絶てあらしの音信て松にのみきく山かげの庵

懐旧夢

284 はかなしと思ひながらもたのむ哉昔は夢の外に見えねば

神祇

285 みしめ縄頼をかくるかひあらば神の心もさぞなびくらん

○続千載集(第)

題しらず

度會朝棟

286 行末の名をこそ思へもしほ草かき置跡のくちぬたのみに

○風雅集(第十九) 神祇

(題しらず 度會朝棟)

287 片そぎのちぎは内外にかはれどもちかひはおなじ伊勢の神風

○新千載集(第十六) 雑

(秋の歌の中に 度會朝棟)

288 見るまゝに世のうき事も忘れて秋の心ぞ月にはれゆく

(○新千載集第二十)

賀のうたとて

(題しらず 度會朝棟)

289 昔原のくにつ神「くにつ神」左に「地祇わざ」わざしげ、れば

とつよに君が御代ぞさ かゆく

北御門歌合

290 浮雲の晴ても猶ぞ時雨ける木葉をさそふ峯のあらしに

291 浅ぢう(た)の露の跡とふ月のみや霜にもかれぬ秋の面かけ

292 水茎の岡のやかたは跡もなしねての朝げの霜のふかさに

293 つれなさをいつまでとてかしたふらん命は人のかぎりある世に

294 待宵も誰あらましに更ぬとてとはれば人のうきになすらん

295 うきを身の咎とばかりは知ながらつらさぞ人に猶残りける

296 堪てすむ友としきけば淋しさもうきになされぬ峯の松風

297 面かけはさらでも残るいにしへを猶忍べとや夢にみゆらん

298 あめの下まもるちかひも神風のおさまれる世の恵にぞしる

○風雅集(第十九)(割注。此歌机右抄にも出たり)

度會家行神主

豊受大神宮にて立春の日よめる (度會家行)

299 をしほ井をけふ若水に汲初て御あへ手向る春は来にけり

北御門歌合

九首題に

300 とひ過る跡にももろき泪かな木の葉の音はよそにしぐれて

301 露ならで玉とぞ見ゆる置霜のこほれば移る浅ぢふの月

302 我跡を人もとめてや帰るらん今朝ふみ分る雪の下道

303 まてといふたがあらましにながらへてうきに命の猶残るらむ

304 更てうき影ともなるは待事のまた身に残る山の端の月

305 よしやたゞ風の便りの真葛原恨みしかひも有身ならねば  
 306 年を経て幾世の夢を残しけん枕になる、峯の松風

○新葉集  
 冬のうた

度會盛行神主

307 有とても猶行末ぞたのまれぬ過にし方を夢と見るにも  
 308 天照す御かげや更にうかぶらん心の水のすむにまかせて

320 梢をばさそひつくして山かぜの落ばに残る音の淋しさ  
 北御門歌合

九首題

続千載集(風雅集に神祇歌とあり。墨書補入)

(風雅集第十九 神祇を)

度會延誠

309 世々を経てくめどもつきじ久堅の天より移す忍穂井の水

321 楨の屋に時雨でもらぬ音づれや嵐にたぐふ木葉なるらん  
 322 時雨ぬる雲をばよそに吹すて、嵐にこほる冬の夜の月  
 323 雪の中に心かよはゞ問やとて我をも人の今朝や待らん  
 324 数ならぬ身をかこてとや偽の情にだにも猶もらすらん  
 325 とはれずは後のつらさとなりやせん今宵は頼む人の言のは  
 326 心には残る恨のありとだにこに出ねば知人やなき  
 327 たゆむ間はしばしまぎる、淋しさも猶忘れぬ軒の松風  
 328 をのづから見る篋もとまらぬは昔にかへる夢路なりけり  
 329 五十鈴川神代久しく住そめて流れの末ぞ限しられぬ

続千載集第十七 述懐歌の中に

度會延誠

310 (補72) かくて世にうきをむくひと思ひしるころのなきを身  
 にかこつかな

北御門歌合

詠九首和歌

311 時雨かと聞ばかりにや吹風にさそふ木の葉も袖ぬらすらん

312 霜結ぶ尾花が袖をよすがにて露の跡とふ野邊の月かけ

313 うき宿のならひになさぬ雪ならばとはる、跡も今朝やまたなむ

314 つれなさを程をしらずは同じ世にながらへばとも頼れやせん

315 とはれけるいつの夕のならひとて契れば人の猶またらん

316 さのみとていはぬ日数の移るをも恨みよはると人やおもはん

317 なれなばと何思ひけん淋しさは同じみ山の松の夕かぜ

318 夢のうちに通ふばかりの面かけは見るもはかなき昔なりけり

319 君が代を常盤に祈る榊葉にゆふしでなびく伊勢の神垣

北御門歌合

栞宜度會貞蔭

九首をよめる

330 吹よはる方にや深く積るらん嵐にもろき峯の紅葉ば

331 見るまゝにさえこそまされ山風の氷りて更る冬の夜の月

332 霜がれし跡さへ今朝は絶にけり雪の下なる野への緑〔草葉歎〕

墨書)は

333 猶ざりのつれなさならば数ならぬ身を忘てもしたはれやせん

(稿者注。一首欠)

- 334 偽のつらさにこりぬ心かな契れば人の猶またれつ、  
 335 心をもすめとしてしめし宿なれど淋しき松の風もいとはず  
 336 面かげの人だのめなる昔かな見てもとまらぬ夢にかよひて  
 337 ます鏡今もくもらぬ御かげこそ神代をうつす鏡成けり

同じ題にて

祢宜度會神主貞香

- 338 吹さそふ風のまゝなる木葉にもをのれと散や猶まじるらん  
 339 霜結ぶ尾花は朽て我袖の涙を露とやどる月かな  
 340 明わたる外山も雪の深しとや出る日影の猶氷るらん  
 341 こりず猶したふ心よつれなさはてもやありと何頼むらん  
 342 せめてなど来ぬ夜あまたの偽をまたじとだにも思はざるらん  
 343 心にやさても残らん言の葉にいひ尽すべきつらさならねば  
 344 絶ずとふ松の風の音づれば馴ても淋し山かげの庵  
 345 見ても猶はかなき物は思ひねの夢路にかへる昔なりけり  
 346 天照す神の恵は久かたの月日とともにつきじとぞ思ふ

同じ九首題にて

祢宜度會延明

- 347 散しくも又さそはるゝ朝風に霜のとだえを見る木の葉哉  
 348 木のまもる心づくしの秋よりも猶さえまさる冬のよの月  
 349 今朝の間をとふべき人は誰なればたのめぬ跡を雪に待らん  
 350 いたづらにうき名ながして妹兄川隔つる中は逢瀬だになし

- 351 うき人の偽しるく更る夜に猶待すてぬ猶もつれなし  
 352 数ならぬ身のことほりのしられずは人のつらさも猶や増らん  
 353 松風のふかぬ絶間も淋しさの猶かこたるゝ山かげの庵  
 354 古をかへして見つるうたゝねの夢の名残を又したふ哉  
 355 跡たれて流たえせぬ五十鈴川深き誓の程もかしこし

権祢宜延良

- 356 定めなくしぐるゝ頃もおもはずは何に木葉の音まがへまし  
 357 冬に見し秋の形見を浅ぢふの袖に残して氷る月かけ  
 358 今朝も猶人とはずは庭の雪に我跡をしむかひやなからん  
 359 つれなさをしたひ忘れぬ年月の積れる程は人もしるらん  
 360 偽もいつの限にたのめとて今宵も更る契なるらん  
 361 ことほりを思ひしらずは数ならぬ身を忘れてや猶恨みまし  
 362 淋しさをいかに忍べど松風のとひもわすれぬ軒端なるらん  
 363 さめぬれば又今さらに忍ぶ哉夢を昔の面影にして  
 364 ちかひをば神も隔てじ瑞垣の内外にかはる宮井なりとも

権祢宜秀長

- 365 吹風にもろき木葉を時雨れかと聞まがへてもぬるゝ袖哉  
 366 時雨くる森の木の葉の跡とめてもりくる月の影の淋しさ  
 367 とはれなば我出がての跡をのみ今朝はつげつる庭の雪かな  
 368 逢事にかへばと思ふあらましの末もたのまぬ我命かな

369 よひの間とおもはせめて偽の契もたのむかたやあらまし  
 370 身をすれば人の心のつらさをも恨むる迄のこの葉ぞよき  
 371 山里のならひと思ふ淋しさも分てしらるゝまつ夕風  
 372 面影も有しばかりに見る程の夢ぞ昔のかたみなりける  
 373 岩戸明し四方の神わざなかりせば光あまねく世を照さめや

権柄宜行俊神主

374 もろくちる程もしられて吹風の絶間にも猶ちる木の葉哉  
 375 更る夜の風にこほる池水にやどらぬ月の影ぞさえゆく  
 376 今朝は又庭にやつまぬ雪なれどとはればいかゞ跡もいとほん  
 377 恋しなん命より猶なき跡におしかるべきはうき名なりけり  
 378 頼めぬを我あらましに待よひの更るは人の偽もなし  
 379 かきくらす涙にまけてつらさをも思ふ斗はいひぞしらせぬ  
 380 山陰の柴の庵はしばしにて軒端の松や千年をも経む  
 381 なき人の面影見せてぬるがうちの夢は昔も隔ざりけり  
 382 動きなき下津岩ねの宮柱いくたび同じ跡にたつらむ

権柄宜度會雅蔭

383 音たてし木葉やうすく成ぬらんさそふにつけてよはる風哉  
 384 間馴し露の名残をしたひてや枯野の月の霜にさゆらん  
 385 今朝も猶とふ人をそき庭の雪にまたぬ日影の跡やいとほん  
 386 かひなしや後の世とだに逢事を契らぬ中にしてん命は

387 偽と思ふ心も誰なれば猶まちすてぬゆふべなるらん  
 388 うき身ぞと思ひしりぬる心をは誰になしてか又恨むらん  
 389 淋しさをうきになしても山里に聞すてられぬ松の夕風  
 390 夢路にもかよふたよりやなからまし現にしたふ昔ならずは  
 391 仕へても神の恵はしらゆふのかけて心にたのむばかりぞ

権柄宜度會富行

392 時雨つる音はつれゆく山風に又音づれて降木の葉哉  
 393 さゆる夜の光を霜に置そへてひとつに氷る冬の月かけ  
 394 夜もすがら積れる程もかつ見えて雪にぞしらむ窓の曙  
 395 言の葉の情もあらばをのづからうきにや残る涙ならまし  
 396 さりとともまつに頼を残夜のふくるもつらき鐘の声かな  
 397 人をのみつらきになして恨むるや身の咎しらぬ心なるらん  
 398 ならひぞと思ひなすにも山里の猶淋しさはまつ夕かぜ  
 399 はかなしやさむればもとの古に又立帰るゆめのおもかげ  
 400 神代より恵はしげき菅原の国のさかへは今もかしこし

権柄宜度會延親

401 吹風のさそはぬひまもをのづから心ともろくちる木葉かな  
 402 さやけさは秋にかはらぬ月影のこほるぞ冬のしるし成ける  
 403 旅衣朝たつ道の行末もまよふばかりの野邊のしら雪  
 404 何事もむくひとならばうき人のつれなさも又身にや帰らん

- 405 待あかす我暁の鐘の音を誰別れにかなして聞らむ
- 406 しらせばや真葛の原の秋風にたへぬ恨の有とばかりも
- 407 庵はまた身をもかくさぬ山里に心こそすめ軒の松風
- 408 今更に昔を忍ぶね覚かな名残を夢の末に残して
- 409 真言ある人をや神も守らん恵はおなじちかひなりとも
- 権禰宜雅冬神主
- 410 聞たゆむひまこそなけれ木葉ちる宿は時雨の幾廻りとも
- 411 影までも秋にかはりて氷る夜の月のかつらに霜や置らん
- 412 いづくをか干潟とも見ん朝はらけ波につゞきて積るしら雪
- 413 つれなさのうつゝに限る中ならば夢にや人の逢と見えまし
- 414 有明の月は雲井に出ぬれどまたれてとはぬ人ぞつれなき
- 415 つらからは思ひもたえて何とたゞしたふ恨の猶残るらん
- 416 いつとても問人はなき山里の心とたれを松の夕かせ
- 417 遠ざかるむかしを今と見る夢の覚るたゞちも現なるかは
- 418 内外とて分べき神のちかひかは同じ恵にてらす月日を
- 権禰宜朝名
- 419 とひすつる時雨の跡の山風にまた音づれてちる木葉かな
- 420 時雨つる雲間に出て定めなき空のならひは月もしりけり
- 421 草の原朝たつ野邊の行末を誰にとはまし雪の下道
- 422 うき身をば人もゆるさぬ命もてあふにかへばと何頼むらん
- 423 とはるべき頼を何に残してか思ひもすてぬ行末なるらん
- 424 したひてもかひなき身こそかこたるれ人の心のつらきのみかは
- 425 馴なばと思ひし峯の松風に猶淋しさをかこつ宿哉
- 426 たのまずよ見るもはかなき夢路より面影ばかり通ふ昔は
- 427 やはらげて光をちりにまじへしや世をてらすべき始なりけり
- 新後拾遺集（第十九）
- 神祇（題しらず）
- 428 御祓する豊宮川のしき波の数より君を猶析るかな
- 度會朝勝
- 新葉集（秋）
- （秋歌の中に）
- 429 初時雨降にけらしも外山なる柞の梢色附にけり
- 度會通詮
- 恋（「の」墨書）うたとて
- （系、三禰宜とあり。南朝宣旨ノ禰宜歟。他書二不見）
- 430 数ならぬみの、中山中々に隔て果なば恋しからじを
- 度會行治
- 雑
- 431 君が代の春にあはずは青柳の糸かく眉を開けざらまし
- 度會朝英

〈解題〉

底本の検証に入る前に、書誌的説明をしておきたい。

前述したように、内務省神社局本の藺田守良『神宮典略』写本（宗務339）十冊は国文学研究資料館史料館に引継文書として収蔵されている。その内の「歌之部」（399-5）は、外題は題簽ナシ、左寄せで「守良神主著／神宮典略 歌之部」とある。旧番號・冊數・函號は「一八二・四六・ぬ十」「和一二三八號」。扉に「守宜藏」。縦23・2cm×横16・0cm、袋綴。前半「神態御歌考」（墨付四七丁）、後半は「神宮正権欄宜和歌」（墨付八七丁）。藏書印は「内務省藏書印」（4.1cm×4.1cm）・「藺田敬家藏書」（4.3cm×2.6cm角丸）・「藺田敬家藏書」（4.5cm×4.8cm）三種いずれも朱印。荒木田家舊藏本。

なお、前稿「西行周辺の人物考証 ―『二見浦百首』作者のこと」（仏教文学39号・平26）では、「校訂者」を「目録」作成者荒木田守良としたが、守宣頭註を「補遺」とした『太神宮叢書』校訂者と混同してしまったので、ここで訂正<sup>5)</sup>しておきたい。「底本は藺田守良（天明五年一七八五〜天保一二年一八四〇、五六歳）写で頭註は藺田守宣（文政六年一八二三〜明治二〇年一八八七、六五歳）に拠る。底本を『太神宮叢書』に収載するにあたり、守宣の頭註および書入の部分<sup>6)</sup>を、「補遺」として『太神宮叢書』編者が校訂したことになる。」

当該写本「神宮正権欄宜和歌」を検証したことに拠る疑問点を、次の(A)〜(E)として改めて掲げてみたい。

(A) 「蓮位」・「蓮上」に関する歌人に関する「目録」に、

「権祿宜成實入道蓮位法師作歌 二首」

「定季入道行専法師作歌 三首」

「権祿宜荒木田神主成實神主作歌 一首」

「六欄宜正四位下成良入道蓮上法師 三首」とある箇所

同集（稿者注。「御裳濯和歌集」のこと）

題不知（墨書補入）

成實入道蓮位

43 深草やうづらなく野の夕暮をとへかし人の秋は来にけり

二見百首歌中に（墨書補入）

44 女郎花は山が裾に木がぐれて独も秋を涼（すぐい）しがほなる

同集

定季入道行専

48 朝みどり霞に染る青柳のはなだの糸に春風ぞ吹

49 立かへり春になぐさむ心こそよに故郷の名残なりけん

題不知（墨書補入）

50 昔にもかはらぬ秋の月を見てあらましかばの人ぞ恋しき

同集

（二見百首歌中に）藤袴をよめる

連上法師

51 藤袴秋の野もせに立霧の絶間に見れば綻びにけり

旅宿落葉といふことをよみ侍ける（墨書補入）

(稿者注。御裳濯和歌集により、「蓮上」は「蓮上」の誤り)

52 木の葉ちる外山の里に旅ねして夢も嵐にさそはれにけり

二見百首歌中に(墨書補入)

53 から衣打手やたゆくなりぬらんふくればすさむ槌の音かな

同集

花の歌とてよめる

権禰宜成實

55 ちらば又物や思はん山桜花にかぎらぬ浮世なれども

右の55番歌の作者は『叢書』では43番歌の前に「権禰宜成實」として翻字されているが、御裳濯和歌集では「成實女」の詠作。したがって『叢書』目録は「権禰宜成實入道蓮位法師作歌 三首」「定季入道行専法師作歌 三首」と合理化した跡が窺われる。なお、「成實入道」が「蓮位法師」という蘭田守良の見解の根拠が示されていないことに注目しておきたい。

また43・44番歌の作者についても、御裳濯和歌集に拠れば43「蓮位法師」・44「蓮位法師(蓮上法師、俗名成定)」とするのみ。「蓮位法師」を「成實入道蓮位」とする守良の個人的見解には根拠が示されない以上従えないと言わざるを得ない。なお、この44番歌の作者表記は「蓮位法師」が「蓮上法師、俗名成定」として「蓮位」と「蓮上」が同一人であるという混乱を示している。言うまでもなく、有り得ない。

「蓮上法師」についても、51・52・53番歌の作者は『御裳濯和歌集』(天理図書館本・神宮文庫本(甲・乙・丙)・東大本居文庫本すべて)には単に「蓮上法師」とのみ表記され、「成良入道」が「蓮上法師」という蘭田守良の見解も根拠が示されていない。なお、目録に付された守宣頭註「作者部類、荒木田成定、按系図、成定神主、成長二男、長延兄、千載集」はその付された位置から「蓮上法師」の説明

(「勅撰作者部類」の「蓮上法師」項という意)であって、『叢書』のいう「成定」の頭註ではない。おそらく『叢書』校訂者は「荒木田成定」に引かれて、「成定」の頭註と誤解したと思われる。

(B)「権禰宜延秀神主作歌 一首」の当該箇所、

続古今集(第六)

(題しらず)

荒木田延秀

169 紅葉ばのちるをぬさとやたむくらむ嵐吹なり神なびの杜(178番歌と同一)

前述の「目録」の該当箇所にも「稿者注」として補足したが、「御裳濯和歌集」では「延季」詠。守宣も「補遺」に「延季」詠として補入。「叢書」校訂者も「○守宣ハ此歌ヲハ延季ノ詠ノ歌トセリ。」との頭注を付している。

(C)「補遺目録」に「蓮位法師作歌 三首」の当該箇所に、

題不知

蓮位法師

45 (補13) 春の夜の明行風にさそはれて谷のと出る鶯の聲

伊勢にたてまつらせ給ける二百首の御製の中に

46 (補14) 谷風の鶯さそふたよりにや山ざと人の春をしるらん

47 (補15) 鶯のはね白妙のあは雪をきえねと春の風は吹つゝ

「伊勢にたてまつらせ給ける二百首の御製の中に」とは「後鳥羽院御製」のこと。こうした「御製」に関する補入は全て守宣に拠る「補遺」にあり、その事実には『叢書』校訂者も気付いていない。ちなみに、74番歌(補22)の後に「此歌成實女の春来てもの次にあり。同人は名をしるさぬ此集の定めなれば、是も成實女のうたなるべし」と墨書補入があり、守宣の大きな誤解と思われる。

また、同じく翻刻部分の□で囲んだ「御製」も全て「後鳥羽院御製」(46・47・62・70・75・77・78・125・173・174・266)。なお、『叢書』は守宣補入の「御製」を見落としているので、補足しておきたい。

62 (補18) 高原の尾上のみやをあれぬともしらでやひとり松虫の聲

78 (補25) しぐれつゝみやま色つく山おろしなみだあらそひちる

このは哉

なお、およそ和歌に携わる者が「御製」を皇室関係(こ)では「後鳥羽院」以外の者と誤認することは通常では有り得ないことである。

(D) 『叢書』校訂者に拠る補足

「権祿宜正四位上満良入道蓮阿法師作歌 十二首」の当該箇所、

同集

おなじ時詠三首和歌

(稿者注。前の「春日於五十鈴河告橋披講良山御百首、神感有瑞忽詠三首和歌」)

権祿宜正四位上満良

24 七そぢにかゝる波路の浜荻の朽ばの身にもあかぬ言の葉

25 神風もさぞおもふらん幾春も匂ひおこせよ志賀の花園

▼神ち山雲のよそにもたのむらん人のやど、へみねの松風

底本には無い▼「神ち山」歌を、『叢書』校訂者は『拾玉集』五巻本系統本の書陵部御所本(501・511)『私家集大成』(翻刻)などで補入。ただし、御所本は第五句「みねの春かせ」。「目録」もこれに連動して底本「十一首」のところ「十二首」に校訂。その他、右のように和歌本文を補入することも含め本文校訂が随所に見られるが、翻刻上の過誤も多々認められる。「神宮正権禰宜和歌」を翻刻する目的以外に本文を他書を以て校訂しようという執筆方針はある意味で仕方ないことだが、テキストの精確さという点では疑問が残るのではないだろうか。

(E) 作者目次の箇所では、「寂延法師」が朱字補入されているが、こ

れについては「稿者注。守宣の頭註は「寂延法師」が「権祢宜荒木田長延」の法名であり同一人物であることが明らかになる以前の段階で付されたものなので、別人として補註を付けている。これも守宣に拠る朱書補註が混乱を来している原因の一つである」としたところである。

その守宣頭註「作者部類、荒木田之子 新勅撰 続後撰」は表記通り「勅撰作者部類」に拠るが、ちなみに荒木田長延と寂延法師の項を確認してみたい。

長延 五位、荒木田 新古雑下<sup>1</sup>

寂延 法師、俗名荒木田 新勅神<sup>1</sup>・恋二<sup>1</sup>・雑二<sup>2</sup>・雑四<sup>1</sup>

続後撰秋上<sup>1</sup>・恋二<sup>1</sup>

なお、寂延法師歌についての守宣に拠る朱字補入は底本の空白部分に脈絡なく混入しているが、さらにその寂延法師歌群（36-42・68-69・92-106・119-124・126-137）の中に「黒姫（17・108）」「越前（76・77・99・104・107・131）」が混入されている。『叢書』校訂者は守良目録にない二人の混入に気付き「補遺」目録に「黒姫作歌 二首」「越前作歌六首」と補充している。実在性疑問の「黒姫」混入の意味は分からないが、「越前（伊勢女房とも）」については大中臣公親女であるから内宮に縁ある人物と判断したからかも知れない。

『叢書』校訂者に拠る「補遺」目録は周到を極めているようだが、それでもない例を挙げておく。荒木田成行（171・172）に続いて補入

された二首（173・174）は実は後鳥羽院「御製」なのだが、「補遺」目録には「度會成行 二首」として計上する。これに加えて、前述の「御製」（寂延<sup>1</sup>首・蓮位法師<sup>2</sup>首・荒木田成實女<sup>1</sup>首・越前<sup>1</sup>首・荒木田成定 女<sup>1</sup>首・度會雅長<sup>1</sup>首）を計上しているのである。

以上、(A)から(E)の疑問点を検証するに、『叢書』校訂者の過誤はしばらく措くとしても、守良のいう「成良入道」が「蓮上法師」ということ、また「成實入道」が「蓮位法師」ということ(8)に根拠が示されていないことは問題と思われる。伊藤正雄・目崎徳衛はこの守良に拠る「目録」表記に拠って「成良入道」を「蓮上法師」としたので、それ以降の研究論文はそれに従ったという研究史があるからである。

前稿でも述べたように、「蓮上法師」は文治三、四年（一一八七、一一八八）奏覧の『千載和歌集』に僧名<sup>2</sup>で入集しているので、成定（『勅撰作者部類』、嘉禎四年<sup>2</sup>88まで祢宜）や成良（建久四年<sup>2</sup>93出家）では有り得ない。同時に守良の註記が根拠に欠けるといふことならば、やはり『千載集』表記の「蓮上法師俗名成實」に拠るべきではないだろうか。笠間書院刊（静嘉堂文庫本）、岩波文庫（久保田淳架蔵の近世書写の一本）、新日本古典文学大系（龍門文庫本）、和泉古典叢書刊（龍門文庫本）だけでなく、国文学研究資料館マイクロ・デジタル資料『千載和歌集』を確認し管見の限りでは、異同は見当たらない。「蓮上法師」を「成定・成良」とする説が崩れた以上、これまで検討もされなかった「成實」という人物が該当する説が浮上してくる

のである。

この「成實」という人物については前稿<sup>9)</sup>で触れたので、ここでは結論のみ掲げておく。『系図綜覧』に拠ると、忠成男の成實は「一棟宜成長弟」とあるので、前述の「成定(成長二男)」・「成良(成長一男)」及び『御裳濯和歌集』撰者の「寂延(成長男。荒木田長延)」の叔父にあたる。寿永元年(一一八二)十一月成立の賀茂重保撰『月詣和歌集』に「荒木田成実」として二首(461・743)採入されているので、『月詣和歌集』出詠の後まもなく出家し、『千載和歌集』には出家後の「蓮上」として入集したことになる。

もう一方の「蓮位法師」という人物についても前稿<sup>10)</sup>で触れたので、ここでも結論のみ掲げておく。「蓮位」に「参議従三位藤原定経」を比定している。定経は勸修寺家流で参議・太宰権師・民部卿などを曆任した権大納言経房の一男、母は従三位平範家女。正治元年(一一九八)十一月十五日出家、法名を「蓮位」と言うが、この法名については『尊卑分脈』では「蓮位(或住蓮)」、「公卿補任」では単に「蓮位」と表記されている。『続古事談』編者に擬せられる人物で、民部卿経房の一男として数多の歌合・歌会に出席する一方、「寶劍」探索に際し九条兼実と後白河院との間の伝奏役を務めるなど、かなり重要な人物であることが判明したのである。

最後に、『神宮正権禰宜和歌』を検証することに拠り、「蓮上」「蓮

位」に関する問題を整理することが出来た。『神宮典略』編者の守良「目録」表記に依拠して人物を比定するのは甚だ蓋然性に乏しいという結論に至ったのである。

〈注〉

- 1 拙稿「西行周辺の人物考証 一「二見浦百首」作者のこと」(仏教文学会大開口頭発表・平25↓仏教文学39号・平26)
- 2 国文学研究資料館史料館「宗務課引継文書」中の「神宮正権禰宜和歌」(『神宮典略(歌之部)』宗務・388-5)に拠る。
- 3 『勅撰作者部類』は「八代集全註」(有精堂・昭51)付載・『新修作者部類』(校註国歌大系23巻)などに拠る。
- 4 久保田淳「御裳濯和歌集」選者寂延について」(國學院雑誌89巻1号・昭63↓「中世和歌史の研究」明治書院・平5)参照。
- 5 同(注1)論文参照。前稿では「太神宮叢書」校訂者を「目録」作成者荒木田守良としたが、守宣頭註を「補遺」とした『叢書』校訂者と混同してしまったので、訂正しておきたい。  
 「底本は藺田守良写で頭註は藺田守宣に拠る。『太神宮叢書』に収載するにあたり、守宣の頭註および書人の部分を、「補遺」として『叢書』編者が校訂したことになる。」
- 6 拙稿「二見浦百首」作者の再吟味 一『御裳濯和歌集』二見浦百首拾遺」の関係を焦点として」(国語国文71巻1号・平14)参照。なお、天理図書館本は拙稿「御裳濯和歌集」校注I・II(県立広島大学人間文化学部起用8・9号、平25・26)に翻刻・校注を掲載している。
- 7 『拾玉集』五巻本系統本の内、この「神ち山」歌が補入されているのは、書陵部御所本(G01・511)のみ。該書は『私家集大成』に翻刻。
- 8 「蓮上および蓮位」に関する先行研究は次の通りである。

- ①伊藤正雄『伊勢の文学』（神宮文庫・昭29）  
 ②窪田章一郎『西行の研究』（東京堂出版・昭36）  
 ③久保田淳・松野陽一『千載和歌集』（笠間書院・昭44）  
 ④奥野純一『伊勢神宮神官連歌の研究』（日本学術振興会・昭50）  
 ⑤目崎徳衛『西行の思想的探究』（吉川弘文館・昭53）  
 ⑥高橋善治『満良神主と西行談抄』（瑞垣二号・昭53）  
 ⑦久保田淳『千載和歌集』（岩波文庫・昭61）  
 ⑧名古屋和歌文学研究会『勅撰集（付、新葉集）作者索引』（和泉書院・昭61）  
 ⑨片野達郎・松野陽一『千載和歌集』（新、日本古典文学大系・平5）  
 ⑩上條彰次『千載和歌集』（和泉古典叢書・平6）
- このうち、①伊藤論文、さらに⑤目崎論文が『神宮典略』を以て改め  
 ているとしているが、②③④⑤⑨⑩が「蓮上法師」を「成良」とする。
- 9 同（注1）論文参照。  
 10 同（注1）論文参照。

〔付記〕内務省神社局本の藺田守良編『神宮典略』写本十冊が国文学研究資料館史料館に「宗務課引継文書」として収蔵されていることを御教示戴いた、皇學館大学研究開発推進センター神道研究所助教の山口剛史氏（昨年末、ロンドン研修中に客死。御冥福をお祈り申し上げます。）に謝意を表したい。また、貴重な書籍の閲覧を御許可して戴いただけでなく、翻刻をも御許可戴いた国文学研究資料館史料館の関係者に御礼申し上げます。